

今、宗祖のお言葉をいただくために

『宗祖讃仰作法』と

『宗祖讃仰作法（音楽法要）』をご縁に

このたびの大遠忌では、法要の作法として『宗祖讃仰作法』と『宗祖讃仰作法（音楽法要）』の二種類が、依用されることとなりました。

これらの作法の大きな特徴は、親鸞聖人が和語で書かれた、ご和讃やご消息が採り入れられていることと、伝統的な声明と西洋音楽という二種類の音楽が依用されている点にあります。

* * *

初期の浄土真宗において、勤行の中心は『往生礼讃』でした。それを第八代宗主蓮如上人が、「正信念仏偈」と和讃六首に改められ、以来わが宗門では、僧侶と門徒がともに声を合わせ、お勤めしてきました。「読経は僧侶が行うもの」と思われてきた、それまでのあり方から、広く一般の門信徒までが親鸞聖人の

お言葉を一緒にお唱えすることとされた点が、上人ならではの、尊く大きなご功績です。

その結果、「正信念仏偈」は、今日に至るまで「お正信偈さん」と呼ばれて親しまれてきました。しかし時代の流れとして、お聴聞の習慣が失われつつある今日、残念なことではありますが、「正信偈さえ難しい」という声は無視できない状況にあります。

そして、時代に即した新たな儀礼・作法の創出が望まれるようになり、この親鸞聖人七五〇回大遠忌を機縁として『宗祖讃仰作法』が制定されることになりました。

この作法の策定に当たって基本とされたのが、まさに蓮如上人による正信偈ご制定の精神を受け継ぎ、ともにみ教えを味わい、ともに讃嘆することができるよう、という方針です。

* * *

その答えのひとつが、「ご和讃」の依用です。

「正信偈さえ難しい」といわれる背景に、漢文体であることが理由の一つとして挙げられるでしょう。そうであるならば、当時の民衆に「やすくこころえさせんとて」としてお書きくださった、宗祖の和語聖教を依用できないだろうか——そう考えた時に思い出されたのが、宗祖が遺された、実に数多くのご和讃です。

それらをまとめた『三帖和讃』（ご本山のお農朝では、これが繰り読みされています）は、「和語の『教行信証』』と称されるほど、浄土真宗のご法義が、余すところなく示されています。そして「正信念仏偈」は、『教行信証』行巻末の偈文であり、いわば『教行信証』のエッセンスが凝縮されたものです。

つまり現代に繋がる和語で記されたご和讃によって、私たちは「お正信偈さん」の教えをあらわすことができるのではないのでしょうか。そのような意図から策定されたのが、『宗祖讃仰作法』です。

また『宗祖讃仰作法（音楽法要）』に依用されているご和讃七首は、「親鸞聖人七五〇回大遠忌についての消息」の意を表したご和讃と、ご門主が近年のご親教で引用されたご和讃によって構成されています。その意味でこれらの七首は、現代に生きる我々にとつての道しるべとなるご和讃といえます。

またいずれも味わい深い和讃が選ばれ、最後が「恩徳讃」で結ばれているのも、宗祖の九十年にわたるご生涯の結論が偲ばれます。

なお、それぞれのご和讃の内容に

ついでには、浅井成海・満井秀城共著『みんなで称える親鸞様の詩——「宗祖讃仰作法」和讃解説』（本願寺出版社）にて、一首ずつ丁寧な解説が施されており、どうぞご活用ください。

* * *

そして、もうひとつの答えは、依用される音楽にあります。

宗祖が和讃というスタイルを用いられた背景には、当時一般に流行していた今様の調べに合わせ、お念仏のご法義を口ずさみながら、楽しく覚え、楽しく讃嘆できるようにとのお心があったのではないかと推察されます。というのも、宗祖の書かれたご和讃は、いずれもが七五調で整えられており、今様の節に合うものとなっているからです。

いずれのご和讃でも結構です、例えば民謡として有名な《黒田節》や

「ねんねんころりや」の歌詞でお馴染みの《子守唄》など、明治以前から日本各地で知られていたメロディーに合わせて唄ってみてください。意外と唄いやすいことに、気付かれるのではないですか。

和讃とは、もともと音楽的要素の濃いものです。その音楽性を十分に活かすべく、音楽法要として制定されたのが『宗祖讃仰作法（音楽法要）』です。

とはいえ、親鸞聖人が念頭におかれたであろう今様の節は、今日と違っては知る由もありません。また知り得たとしても、その節は、西洋化された音楽文化のなかに生きる私たちには、馴染みの薄いものでしかないでしょう。

そのため『宗祖讃仰作法（音楽法要）』で依用される西洋音楽は、今日の日本社会において、もったも

染み深いであろうと考えられる、大衆（ポピュラー）音楽的なスタイルとなつていきます。この点は、これまでに制定された音楽法要（『宗祖降誕奉讃法要』など）では、合唱団を念頭にクラシック音楽のスタイルが採り入れられ、ともすれば一般にはなじみの薄いものとなつてしまったという反省に立っています。

また音楽のスタイルというのは、時代や環境によつて変化を見せる（特に二十世紀以降は激しくなっています）ものです。それゆえ、世代や生活環境によつて、特定のスタイルの音楽に対して抱く印象や嗜好などは、人によつてさまざまでしょう。

「お寺で営まれる法要」といえば、音楽的には声明や雅楽などの伝統邦楽をイメージされる方も多く、それを期待して参拝される方にとつて西洋音楽は、ある種の違和感を与える

ことになりかねません（慣れることで違和感を取り除かれることとは思いますが）。

そうした点と、伝統の継承という点に鑑み、『宗祖讃仰作法』では、声明と雅楽が依用されています。

* * *

ご和讃という現代に繋がる親鸞聖人のお言葉を、現代に生きる私たちがイメージする音楽にのせて、ともに唱えし、ともに味わう——これら新たな作法によつて、より一層のご縁が深まることを願つてやみません。

教学伝道研究センター

本願寺教学伝道研究所

本願寺仏教音楽・儀礼研究所